

日 本百景の高尾山。その雄姿を眼前に望む小高い丘に館ヶ丘団地が完成したのは38年前だ。緑に囲まれ、起伏に富む広大な敷地に53棟の建物が並ぶ。棟数からは想像できないほど、ゆったりとした空間が広がる。

敷地を歩くと、黄色と緑色の2台の奇妙な乗り物に遭遇する。前が2輪、後ろが1輪の、テーマパークを走るような代物だ。後部座席はひとり用。ハンドルとペダルが見える。前部には2人がけの座席がしつらえてある。たまたま乗っていた高齢者の女性に聞いた。

「この団地は広いでしょう？ しかも坂道ばかり。団地内にスーパ―はあるけど、年寄りには買い物したいへんなのよ。とくに重い荷物のおときはね。でもね、これに乗せてもらえるようになって、本当に助かっているのよ」

奇妙な乗り物は自転車タクシー。そもそもドイツで生まれたベロタクシーを模範とする。日本では2002年に京都で運行が開始され、館

団地を縦横に走る高齢者の足

たてがおかだんち
東京・館ヶ丘団地 (1975年・昭和50年)



新田匡史
につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

ヶ丘では今年5月から走り始めた。

◆館ヶ丘自治会の再出発

完成当時の館ヶ丘は20代から30代の世帯が中心だった。館ヶ丘自治会の西田田鶴子副会長は、住民同士の仲が良かったと言う。

「団地は4つの区域で構成されていますが、それぞれに自治会が設置され、ほとんどの住民が加入しました。それを束ねる連合自治会が主催する朝市や運動会などのイベントは、常に大盛況でした」

10年ほど経つと、子育てを終えた母親が働き始めた。時はバブル期に突入。持ち家を購入した世帯から館ヶ丘をあとにした。代わりに入居してきたのは、60代以上の年金生活者だ。医療センターが隣接していることも大きかった。

「あとから来た人は自治会を敬遠し、運営を担う人がいなくなりました。自治会は存続できない状態になってしまったのです」

団地の高齢化率は46%強。当初の入居者の高齢化とともに、新た

に入居した人の高齢化も進み、この状況を憂慮した前自治会長が自治会の再興を訴えた。住民アンケートでは「つながりを持ちたい」という声が多かった。高齢化した住民が孤立している。自治会の再結成は2010年に実現する。

翌年、団地に「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」が設置された。東京都のシルバー交番設置制度に基づく高齢者の見守り事業だ。室長の今泉靖徳さんはこう話す。

「病院で言うと緊急救命室。高齢者の話を聞いて、必要なところにつなぐという役割です」

自治会と相談室は、高齢者を孤立から守る視点で共通する。西田さんは「今泉さんが来てから、相談室と自治会が一体となって運営するようになりました」と言う。

◆自転車タクシーから始まる交流

「自治会再結成の目的のひとつが買い物難民を救うことでした」

西田さんはそう語る。

「苦労して買い物する人や引きこもりが楽しいと語った。『同世代の仲間と遊ぶ楽しさとは違いますね。自分が必要とされる喜びに近いかもしれません』

別の女子学生も、男子学生と似たような感覚で館ヶ丘に通う。「楽しくて来ているところにいる人がいる。だから助けるといって感じでしょうか。それに、住民の方々が話を聞くのが基本的なのに、今では私の話を聞いていただく雰囲気が出ています」

孤独を感じながらもじっと黙っていた高齢者の姿勢も変化する。「支援を受けるだけじゃ嫌。学生さんにお返ししたいのよ」

人と人の接点がない世代に、交流が楽しいという感覚が生まれていく。西田さんは、期待を込めて言う。

「館ヶ丘には未来があります」



自転車タクシーは荷物や人を運ぶだけではなく、「コミュニティ」でもある。

もる人たちが何とかしたい。でもこちらが届けるのはよくない。外に出てきてもらわないと。何らかの移動手段を探していました」

同じころ、今泉さんは雑誌でベロタクシーの記事を見かける。

「運転中の会話が健康状態や生活環境の情報収集できるので、高齢者の見守りにもなるのです。いつかやれたらと、壁にペロの写真を貼っていました」

写真を目にしたUR職員のアドバイスで、自治会が補助金の申請を出し、これが承認された。

自転車メーカーにオリジナルデザインを依頼し、これを発注。

大きな問題があった。「自治会が高齢者が多く、相談室は私を含めふたりだけ。人手不足は明らかでした。そこで、近隣の大学に呼びかけ、学生の力を借りることにしたのです」

だが、住民は見慣れ

ない学生が歩いていてだけで警戒した。心ない言葉を浴びせられた学生もいる。

「アルバイトか何かで、善意ではないかと思ったのです。学生はかなりヘコんでいましたね。そんなつもりじゃないのに涙を流す女子学生もいました」

それでも、学生は住民のために懸命に汗を流した。団地内の掃除や給水所での作業。団地内に倒れ込んでいる高齢者がいないか。遠くから眺めていた住民は、やがて自ら学生との距離を縮めていく。

西田さんによると、館ヶ丘に来た学生は当初迷っていたという。「高齢者の役に立っているのか不安だったみたい。だからこう言っ

てあげたんです。ただいるだけでいいんだよ。高齢者はそれだけでとっても嬉しいんだから、と」

学生は、やがて高齢者と接する機会を自ら探し始めた。倉庫で埃をかぶる神輿を探し出し、27年ぶりに夏祭りを復活させたのも学生だ。ある男子学生は、高齢者と会

街に、ルネッサンス



【企画制作】新潮社